

うらみは さようなら



「根に持^{ねも}ってはだめだよ」って
言^いわれたことはあるかな。

意味^{いみ}はちょっと分^わからなかったかも。

「根^{ねも}に持^めつ」って、目^めに見^みえないからね。

根^{ねも}に持^じつことが、実^{じっさい}際^{こうどう}に行^{あらわ}動^{はなし}として現^{あらわ}れた話^{はなし}をしよう。

友^{とも}だちのアヒルのミツクに起^おこったことなんだ。

ある日^ひのこと、牧^{ほくじょう}場^ばにいたら

ベニーがっつ^{ばし}走^きって来^きた。

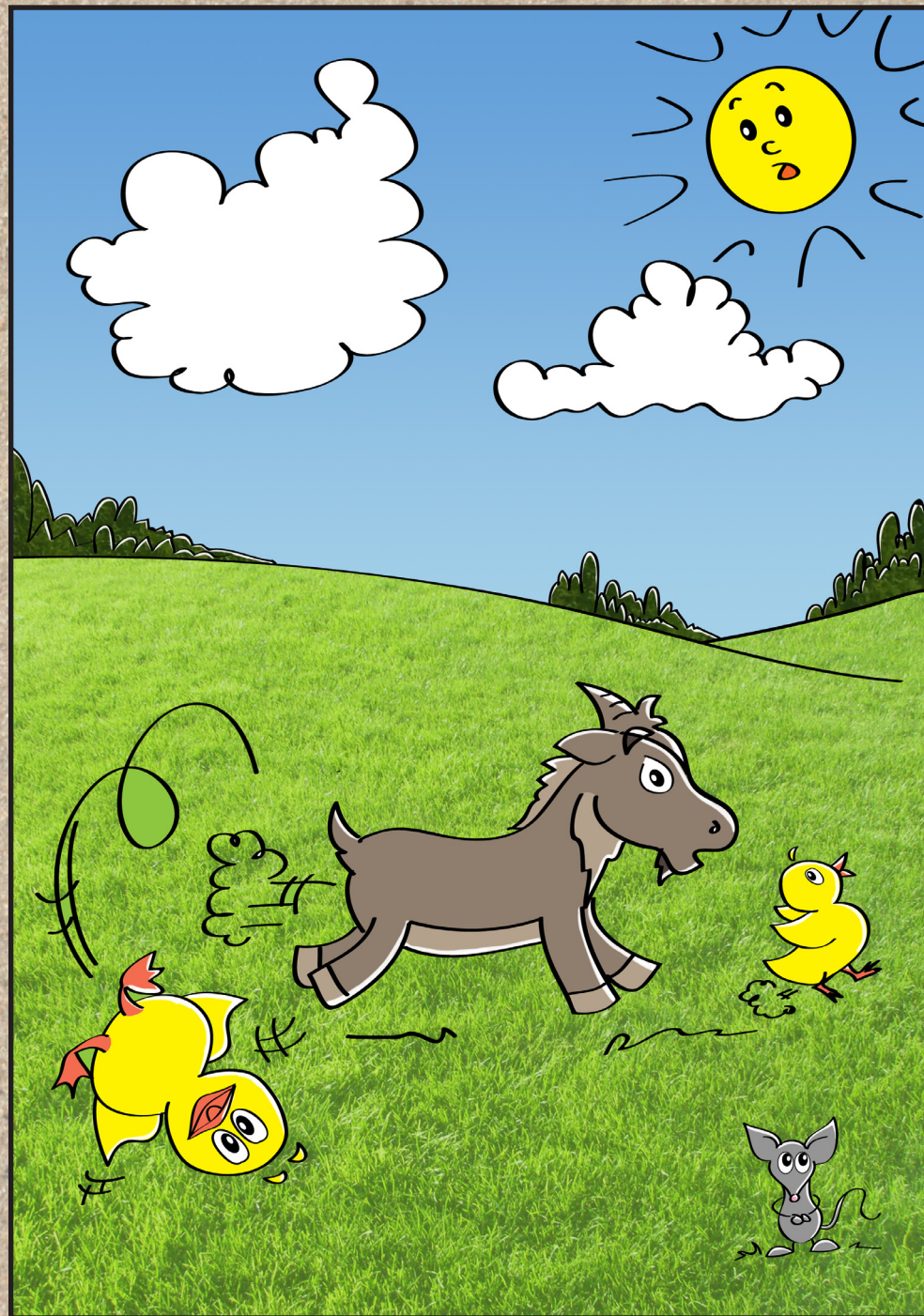


食^{しょくじ}事^じのあ^{あと}ち^{いけ}池^むに向^{ある}か^{ある}つて歩^{ある}いていたら

いきなりベニーが走^{はし}っ^きて来^きた。

ベニーは遊^{あそ}び相^{あいて}手^てのジェニーに追^おいつこ^おうと

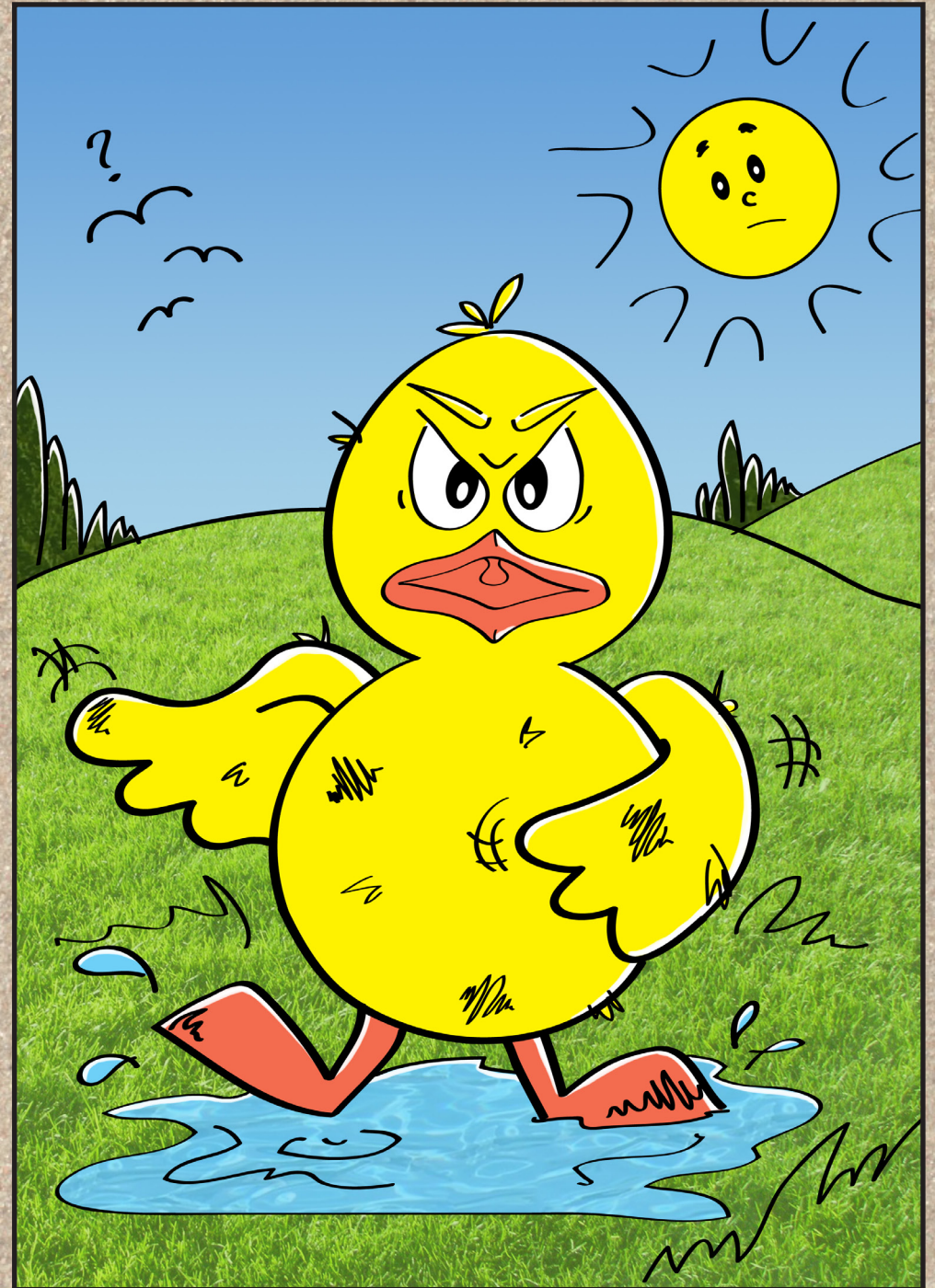
ほくを^とつき飛^{はし}ばして走^さり去^さった。



ほくが^{ある}歩いてるのが^み見えなかったのがい？
「ごめんね」も^い言わずに^い行ってしまうなんて。
ベニーは^お追いかけっこに^{むちゅう}夢中で、
^{ぜんぜん}全然^{きつ}気付かなかったんだ。

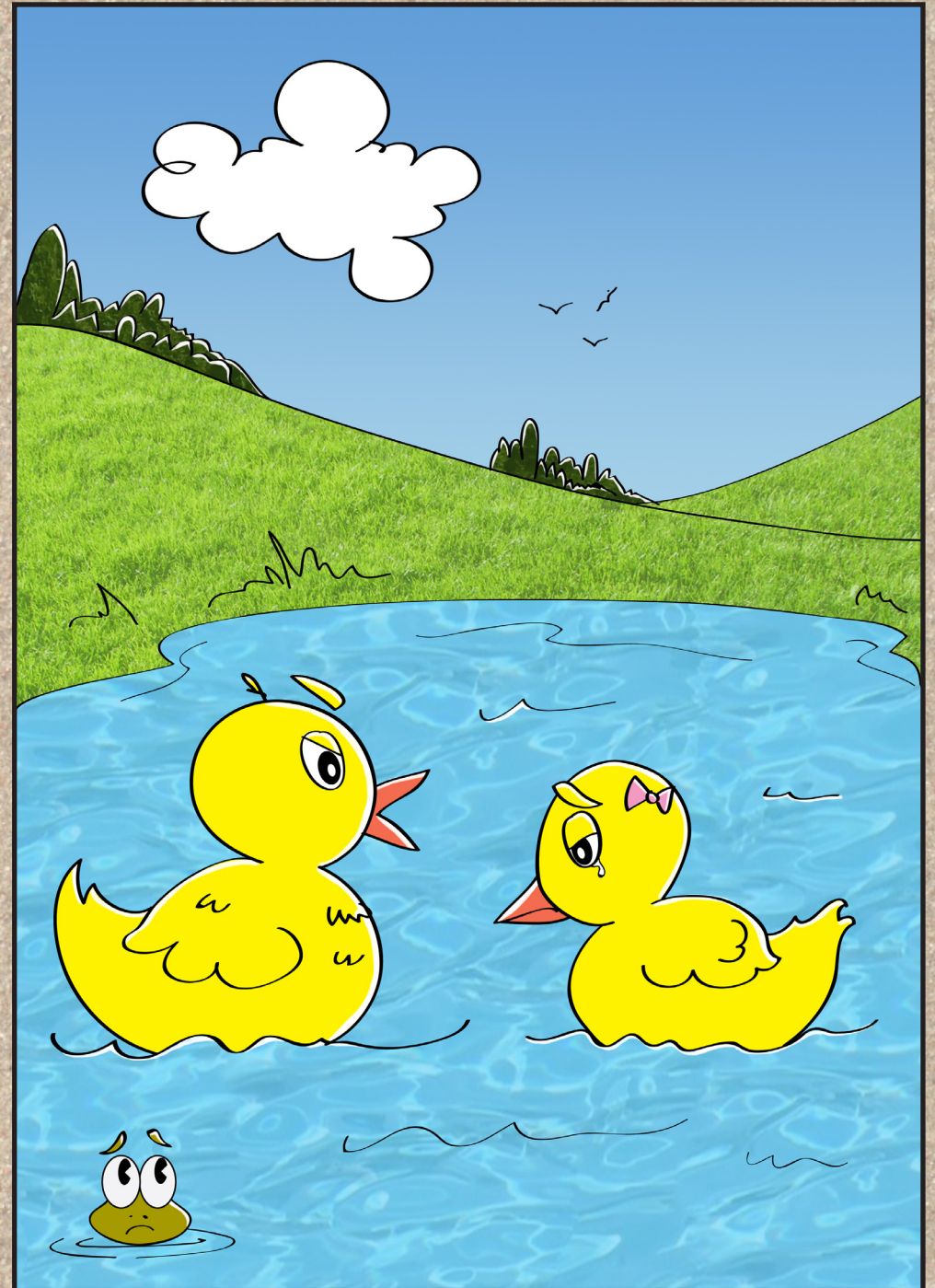
おかげで^{はね}羽は^{どろ}めちゃくちゃだし^{どろ}泥んこだ。
ほくはクワックワツと^い言いながら^お起き^あ上がった。
そして、^{ほくしょう}牧場の^{ほう}方^むに^む向かってさけんだんだ。
「だれを^とつき^み飛ばしたのが、見えなかったのかーい？」

ぶつぶつ^い言いながら、ほくは^{はね}羽を^{まい}1枚^{まい}1枚^{まい}つくろった。
そして、また^{いけ}池へと^{ある}歩き^{はじ}始めた。
いつもの^{みち}道をね。だけど、^{ほか}他の^{たの}みんなが
楽しんでるのが^{たの}ねたましくな^{たの}ったんだ。



「^{いっ}体 ^{なん}が ^{たの}そんなに ^{たの}楽しいんだい、サリー？」
ほくは ^{いけ}池で ^{ほか}他の ^やアヒルに ^あ八つ当たりした。
「^{じんせい}人生って、^{たの}そんなに ^{たの}楽しいものかい。
^{かんが}考えが ^{あま}甘過ぎるんだよ。」

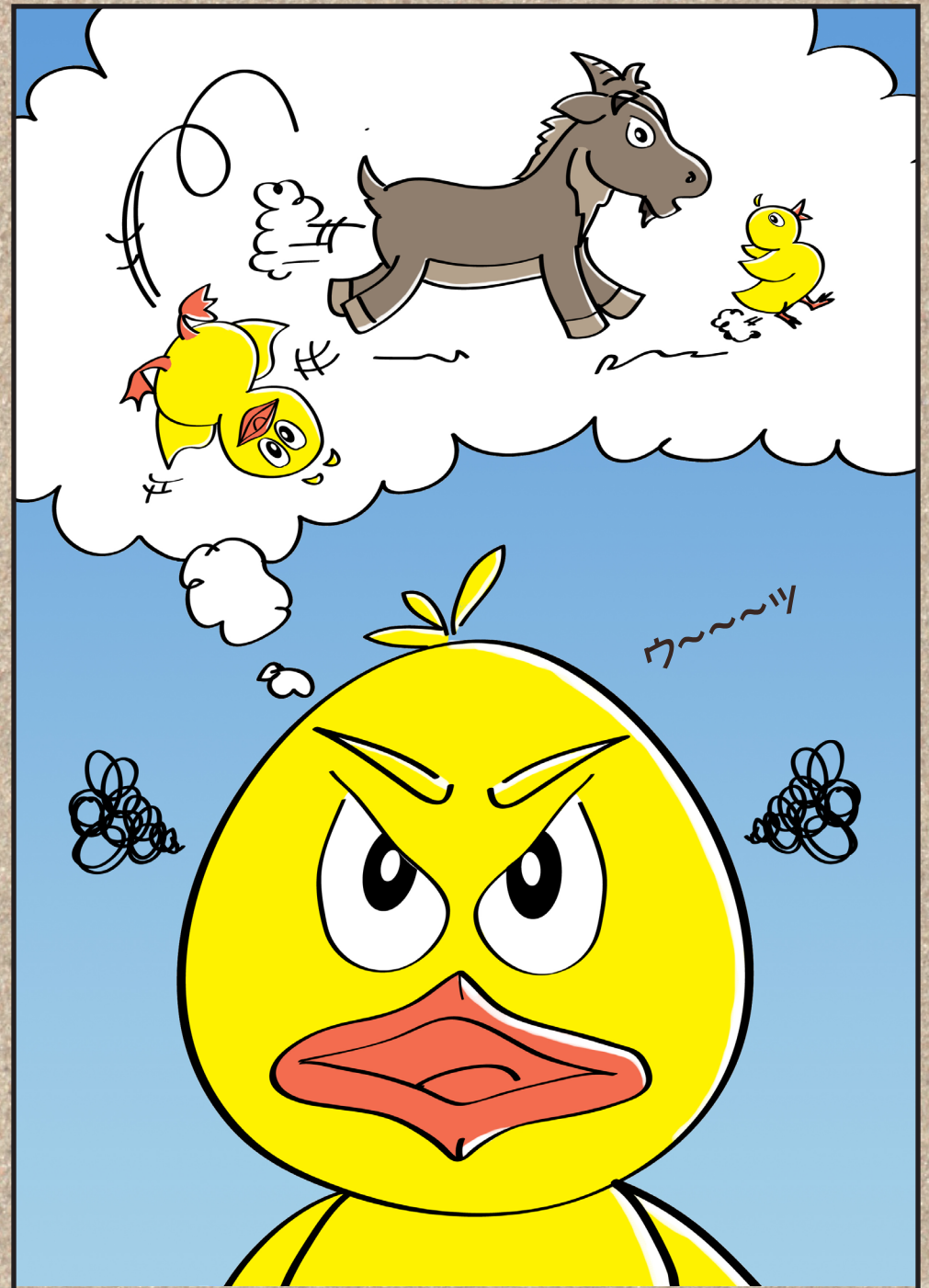
それまで ^{よう}ずっと ^き陽気だった ^{とも}友だちは
すっかり ^{かえ}しょげ返ってしまった。
^め目には ^{なみだ}涙が ^{あふ}あふれ、
^{あそ}遊ぶのも ^{いや}いやに ^ななってしまうんだ。



たし 確かに ぼくは 被害者^{ひがいしゃ}だった。
ベニーが かけぬけて 行ったからじゃ なくて、
「根^ねに 持つ^も」ことのね。
ぼくは 完全^{かんぜん}に 無防備^{むぼうび}だった。

「根^ねに 持つ^も」ことって、自分^{じぶん}が 不当^{ふとう}に
あつかわれたと 感じる^{かん} 時^{とき}に 生じる^{しょう} ものなんだ。
すぐに 気^きを 取り直^とす 代わり^{なお}に
自分^{じぶん}を あわれんだり 落ちこむ^お 時^{とき}にね。

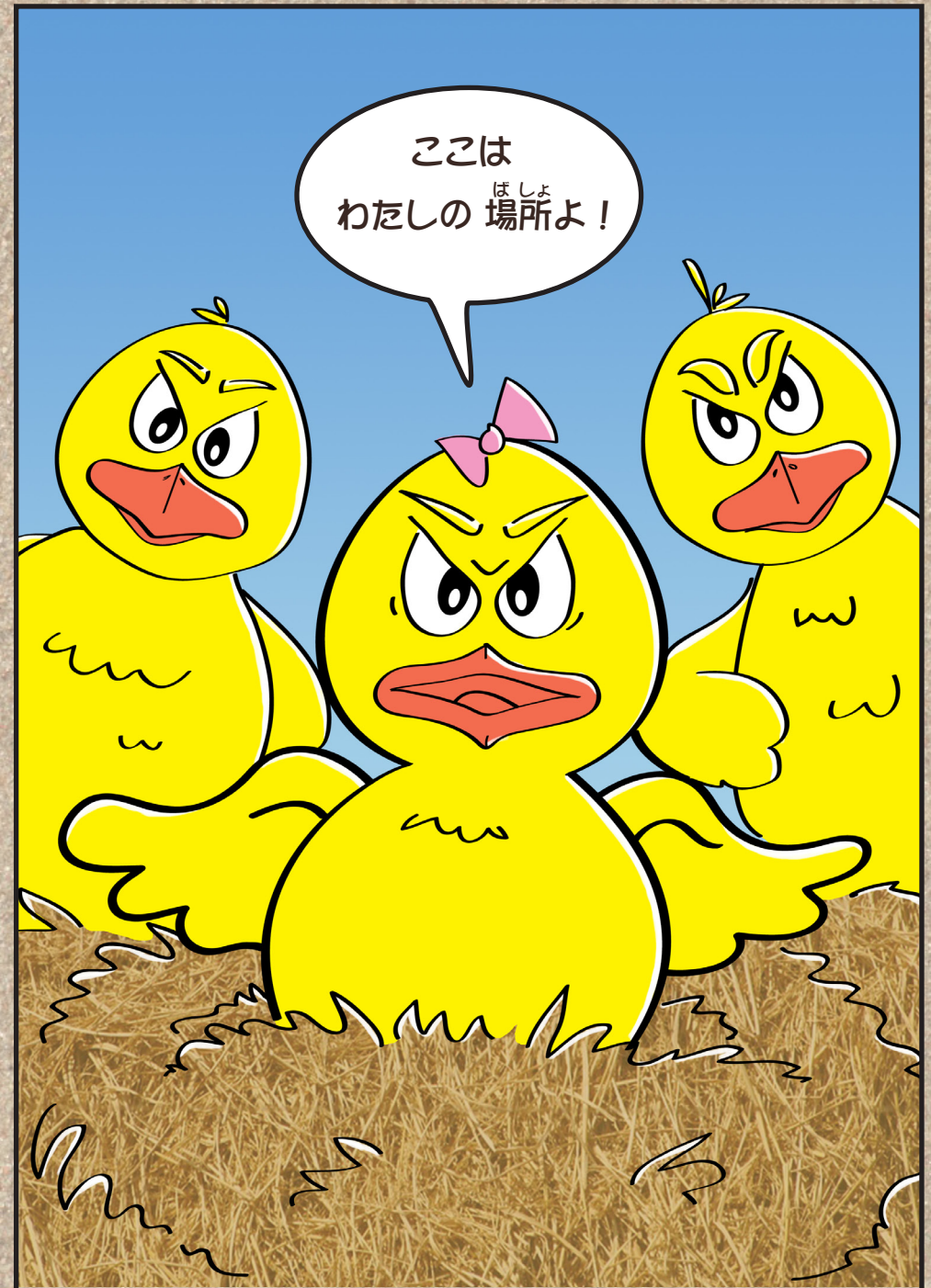
ぼくは、ベニーを ゆるして あげる べきだったんだ。
ゆるしてって 頼^{たの}まれても 頼^{たの}まれなくてもね。
そうすれば、ぼくは きずついて くさる ことも なく
の 乗りこえられたんだ。



ベニーは ^{なに}何が ^お起こったのか、^き気付きもしなかった。
いっしょに ^{あそ}遊んでいた ジェニーもね。
^{わる}悪気は ^きなかったんだ。
ほくだって、ちょっと ^{ころ}転んだだけさ。

だけど、ほくは ^ねそのことを ^も根に ^も持って
みんなに ^や八つ当たりした。
^{いけ}池で ^いいっしょだった、^{けん}それまで ^ぎ元気で ^{よう}陽気だった
^{とも}友だちに ^{した}したようにね。

^{こん}今度は ^とサリーまで ^お落ちこんでしまった。
その日は ^ひずっと、^{つら}ふくれっ面だったんだ。
サリーは ^{まわ}周りの ^やアヒルたちにも ^あ八つ当たりした。
^す巣の ^と取り合いを ^あしたりしてね。



もう、あやまらないといけない。
ぼくの せいで ^{はし}始まった ことだから。
ベニーとジェニーを ^{さが}探して ^だ出して、
ぼくたち ^{にん}3人で ^{なかなあ}仲直りをした。

「ふくれっ面^{つら}をして、ごめんね。」
ぼくは、2頭の ^{とも}友だちに あやまった。
^{かれ}彼らは ビックリして、どうして
あやまってるんだろうって ^{かお}顔で ^みぼくを見た。

「あのね」、と ^{せつめい}ぼくは 説明した。
^{きみ}「君たちが ^{はし}走り回って ^{あそ}遊んでいた ^{とき}時、
ベニーが ^とぼくをつき飛ばしたまま、
^{なに}何も ^い言わずに ^{はし}走り去って ^い行ったんだ。」



今度は ベニーが おどろいて、あやまった。

「うわあ、それは ほんとうに ごめんね、ミック！」

そばを 通る 時に スピードを 落とすべきだったよ。

そうすれば、君は つき飛ばされずに 済んだのに。」

「悪気が なかったのは 分かってるよ。」

「君って、すごく 大人なんだね。」

ほくたちは 仲直りして、万事 元通りになった。

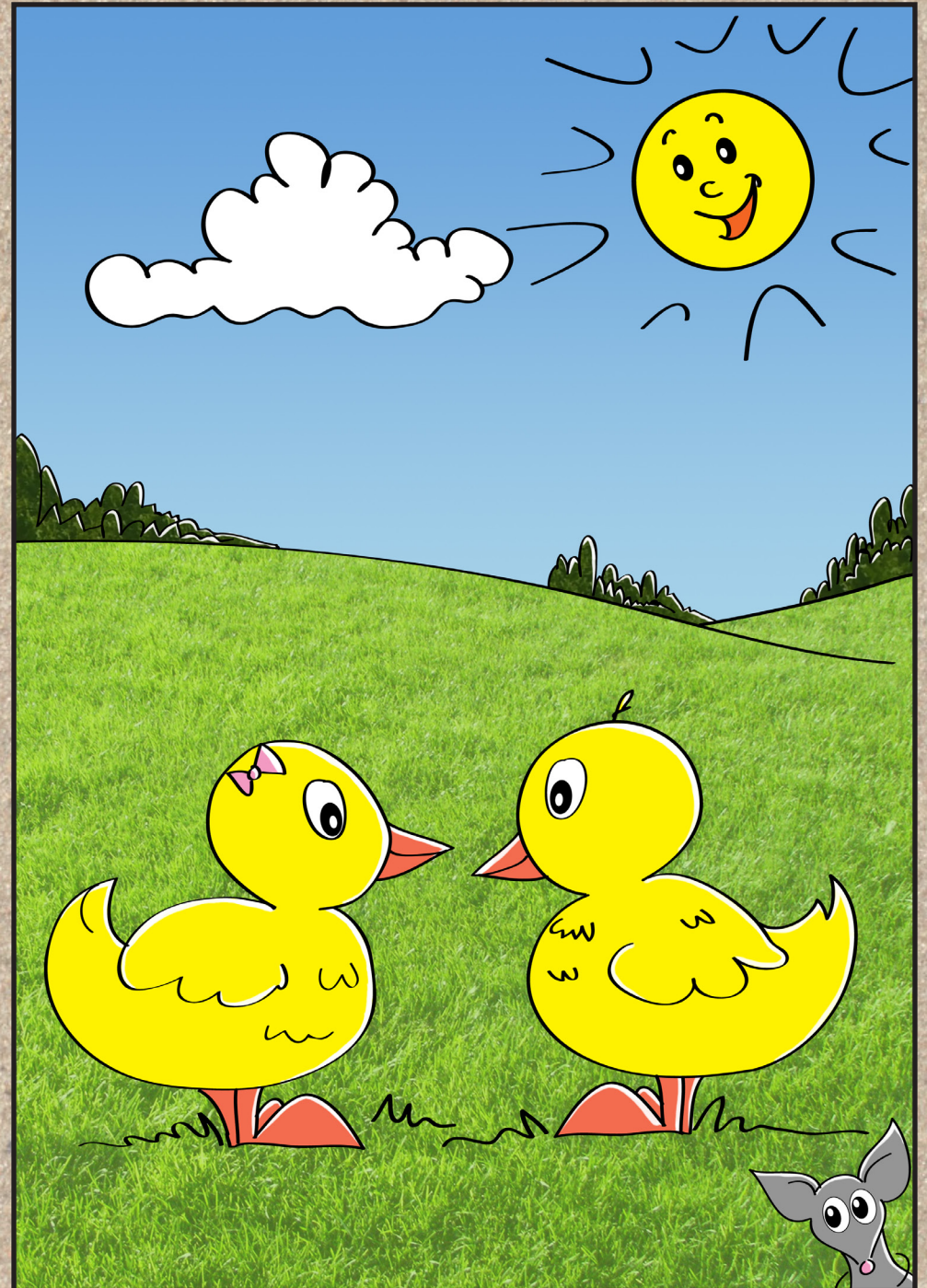
これで、おぞましい うらみの 根は なくなった。

それから ほくは サリーの 所にも 行った。

すごく きずつけちゃったからね。

「本当に ごめんね、サリー。」

君は ほくの 親友だよ。それを 言いたかったんだ。」





そういうわけで、牧場には ^{ほくしょう}平和が ^{へいわ}もどった。

また ^{ながよ}仲良しに ^{ほくしょう}もどったんだ。

うらみの ^ね根が ^{ほく}ぼくたちの ^{ゆうじょう}友情を ^{こわす}こわすために
だまそうと ^{はい}入って ^き来たけどね。



ぼくたちは、^{かん}完ぺきになったわけじゃない。

^{とき}時には ^{ながま}仲間の ^き気を ^{がい}害することもあるさ。

だけど、ぼくたちは ^あたがいに ^{ゆるし}ゆるし合うことも ^し知ってる。

そして、^{ゆうじょう}友情を ^{こわす}こわすようなことは ^{ほう}放っておかないんだ。



^{ゆうじょう}友情は、^{かけがえ}かけがえのないもの。

あやまるだけの ^{かち}価値は ^{ある}あるよね。

それは ^{きも}きずついた ^け気持ちを ^さ消し去り、

うらみの ^ね根を ^{ほほえみ}ほほえみに ^か変えてくれるんだ。

